



図83 荏原の八雲橋 明治24年(1891)10月10日に竣工式が行われました。写真は「山陰新聞」明治43年6月10日号にありますが、二代目八雲橋と考えます。

明治二〇年(一八八七)ごろです。この二本の航路のうちまもなく松江荏原航路が優位に立ちました。それは、下庄原村が船川の浚渫^{しゅんせつ}をして航路の整備をしたことと、二四年度における国道二八号(新山陰道)の完成のためです。新川には新しい橋がかけられ、二四年一〇月一〇日には開通式が行われ、橋名は八雲橋と命名されました。出雲と八雲は姉妹のようなことばです。出雲を代表する名橋というのが命名の由来でしょう。写真は、明治四三年(一九一〇)の鉄道山陰線出雲今市間開通を祝う「山陰新聞」の同年六月一〇日号に掲載されたもので、明治三十一年に改架された二代目八雲橋と考えられます。南から北へ向けてみたものです。

汽船の発着した場所は
いまでも町内地名を南
灘・中灘といいます。そ
して、ここから町部の中
心を南北に走る国道へ出
る通りを汽船町といいま
す。この一帯には人力車
をひく人たちが、汽船の
荷を上げおろしする人た

ちや、それらの荷を馬車で運ぶ人たちの出入りが多く、また旅客相手の休憩所や商店なども並び、なかなかの賑わいを呈しました。

ラフカディオ・ハーンが松江中学の英語教師として赴任してきたのは明治二十三年八月末です。ハーンは、九月三日通訳の真鍋青年をつれて、汽船で松江から荏原に着き、ここから人力車で出雲大社参詣のため杵築(いまの大社町)へ向かいます。荏原の町や北高瀬川沿いの旧道の風情が『日本瞥見記』に描かれています。

われわれは、杵築へは寝る時刻にならないうちに着こうと思うので、荏原村をゆつくり見て行く暇もない。俵^{くま}が小さい町を通りぬけて、水田に蔽^{おほ}われたひろびろとした田圃の方へとひた走りに走って行くあいだに、わたくしはほんのただ、広い通りを飛ぶようにして見たにすぎなかった。(いかにも絵にかいたような美しい町なので、できれば、一日ここで過して行きたかったのであるが。)

ハーンは翌年七月二十六日、松江中学の西田千太郎教頭とまた杵築訪問をしますが、このときは松江発の汽船にのり遅れ、宍道・荏原を経て人力車で杵築へ向かいます。このときは、新国道を西へ向かったはずです。ハーンの夫人もあとで杵築へ来ます。八月一〇日、荏原の辰巳屋で昼食、